

## 28. 腹部大動脈瘤における ultrasound と RI-angiography との比較

一柳 健次 多田 明  
桑島 章 分校 久志  
油野 民雄 久田 欣一  
(金大・核)

超音波と RI-angiography との併用は、腹部大動脈瘤の診断と経過観察に有用である。対象は拍動性腹部腫瘍を触知した20症例で行ない、超音波の検出率は95%以上と非常に高かった。RI-angiography は大動脈の全体像、径拡張、RI 停滞、動脈瘤の形をよく評価でき、超音波は壁在性血栓

の有無、大動脈の限局性拡大、外径内径の距離壁の厚さや動きをよく評価しえた。特に壁在性血栓に関しては、大動脈造影が、その血栓の存在を動脈壁の不整や造影剤の不均一で暗示さすが、その厚さまではわからないのに対して、超音波では軽度の Echogenic Area として検出しえた。超音波は手技が容易で、非侵襲的であり、腎機能低下例や高齢者、一般状態の不良な患者にも施行でき、経過観察にも適している。また、RI-angiography で若干の False Negative 例を認めたが、この原因として血栓形成による内腔の狭小化、器質化した Dissecting aneurysm などが考えられた。